

中国四国地域農業をめぐる事情

取組事例集

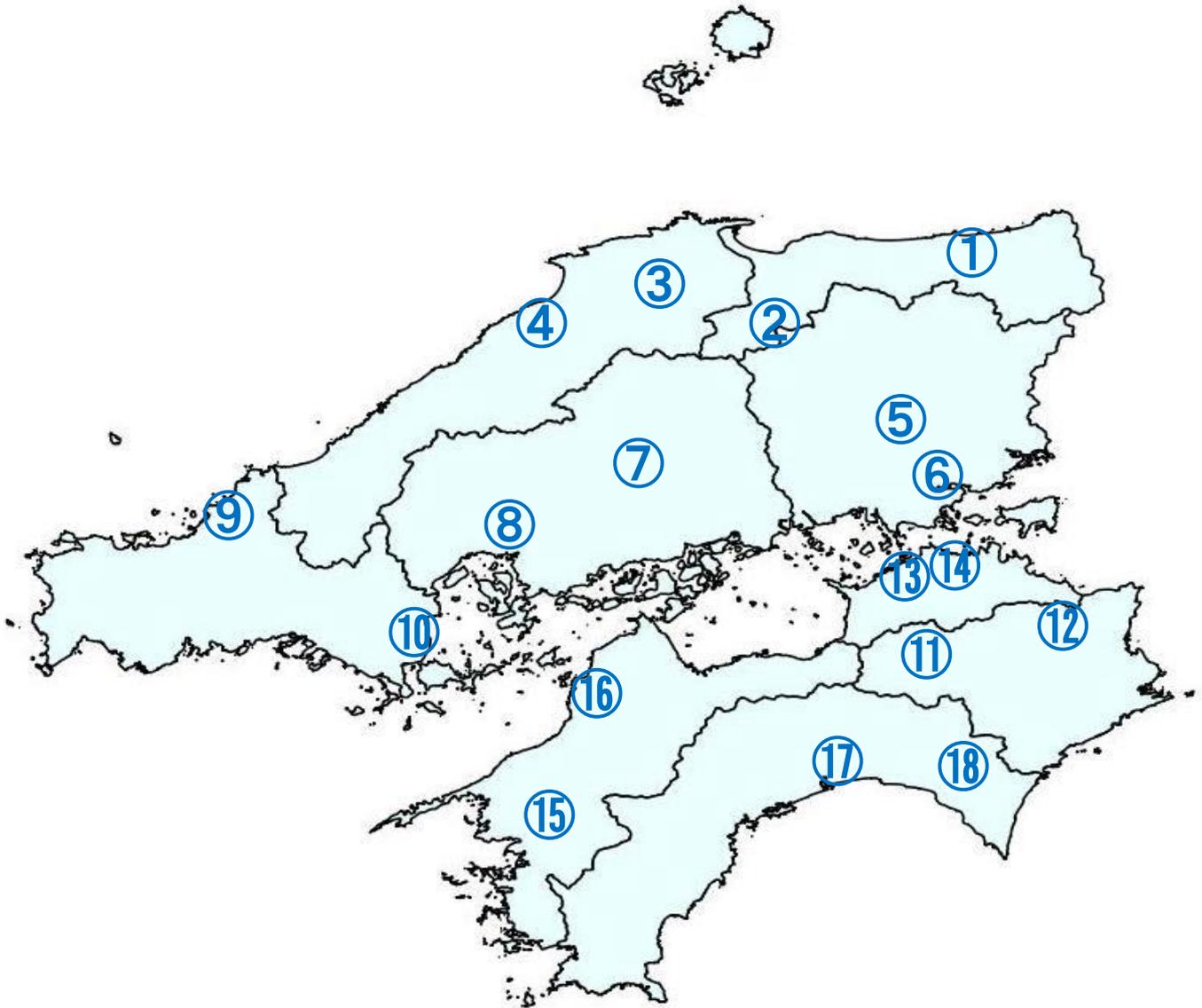
令和6年12月

農林水産省
中国四国農政局

掲載事例一覧

①	鹿野町河内果樹の里山協議会 地域内外が連携した果樹の里山によるむらづくり	地域活性化
②	日野郡鳥獣被害対策協議会実施隊 地域住民と連携して農作物を守る	鳥獣害対策・ジビエ
③	ライスフィールド（有） 農地を守り活かし、田園風景を守るために	農地集積 生産基盤強化 担い手 生産性向上 土地利用型作物 地域活性化
④	大田商工会議所 隠れた資源「大田の大あなご」のブランド化	その他
⑤	JA岡山加茂川ぶどう部会 ぶどうの「ハイブリッド生産団地」による産地振興	農地集積 生産基盤強化 担い手 園芸
⑥	株式会社おおもり農園 農福連携による労働力確保と障害者の育成指導	担い手 園芸 農福連携
⑦	広島県酪農業協同組合 安価で高品質な飼料の安定供給を目指して	生産基盤強化 土地利用型作物 畜産
⑧	広島県立広島特別支援学校 地域との連携を通じた協動的な学びの充実を図る	園芸 農福連携
⑨	農事組合法人福の里 皆が主役 福来る里で美田をつなぎ、にぎわいの創出	土地利用型作物 6次産業化 農福連携 地域活性化
⑩	株式会社神東ファーム マイヤーレモンで地域を元気に！	担い手 園芸 6次産業化 地域活性化
⑪	一般社団法人そらの郷 「住んでよし・訪れてよし」の観光地域づくり	地域活性化 その他
⑫	有限会社NOUDA なると金時を食べたブランド豚で6次産業化	畜産 加工・流通 6次産業化 その他
⑬	鎌田醤油株式会社 世界中の食卓に笑顔をお届けする	輸出・認証
⑭	株式会社カワイ 香川県ブランド「オリーブ牛」の輸出拡大	輸出・認証
⑮	百姓百品グループ 地域課題を農業で解決！農も、福祉も、地域一丸	農地集積 加工・流通 農福連携 地域活性化
⑯	愛媛県立伊予農業高等学校生活科学科食物班 農福連携の活動に高校生が奮闘中	農福連携 地域活性化
⑰	一般社団法人エンジェルガーデン南国 有機グアバでノウフク・産官学連携・SDGs・6次産業	担い手 園芸 6次産業化 地域活性化
⑱	馬路村農業協同組合 村をブランド化し魅力を全国に発信した馬路村農協	担い手 6次産業化 地域活性化 その他

■ 位置図



- | | |
|------------------|-----------------------|
| ①鹿野町河内果樹の里山協議会 | ⑩株式会社神東ファーム |
| ②日野郡鳥獣被害対策協議会実施隊 | ⑪一般社団法人そらの郷 |
| ③ライスフィールド（有） | ⑫有限会社NOUDA |
| ④大田商工会議所 | ⑬鎌田醤油株式会社 |
| ⑤JA岡山加茂川ぶどう部会 | ⑭株式会社カワイ |
| ⑥株式会社おおもり農園 | ⑮百姓百品グループ |
| ⑦広島県酪農業協同組合 | ⑯愛媛県立伊予農業高等学校生活科学科食物班 |
| ⑧広島県立広島特別支援学校 | ⑰一般社団法人エンジェルガーデン南国 |
| ⑨農事組合法人福の里 | ⑱馬路村農業協同組合 |

※ この地図は、必ずしも我が国の領土を包括的に示すものではありません。

地域内外が連携した果樹の里山によるむらづくり

鹿野町河内果樹の里山協議会（鳥取市鹿野町）

会長 佐々木 千代子

○地域内外の人々により耕作放棄地を果樹園に再生（4.5ha）

○学生等による企画運営と活動・商品の情報発信

URL: <https://kajiyuno-satoyama.com>

カテゴリー

地域活性化

○ 取組内容

地域住民有志と鹿野町総合支所、NPO法人などにより「鹿野町河内果樹の里山協議会」を設立し、地域内外の人々による耕作放棄地の再生と観光・体験農園による地域の活性化を目指す。

○ 取り組みに至った経緯

中山間地域にある鹿野町河内地区では、過疎化・高齢化により耕作放棄地が増加するだけでなく、地域全体の疲弊も懸念されるようになった。地域には「守ってきた農地を雑草だらけにはしたくない」という強い気持ちがあり、耕作放棄地を果樹の里山に転換することで農地を守り続けることとした。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

耕作放棄地の再生では、除草、苗の定植、獣害対策などの管理業務が必要であったことから、地域の農家だけでなく、学生を含めた地域内外の多様な人たちが集まり、地道な活動を行った。また、大学生による「河内里山ツアー」、「果樹の里山まつり」の企画運営や情報発信、地域の女性を中心に収穫した果実の加工品開発、鹿野町出身のデザイナーによる果樹の里山の活動や商品のPRなど地域を活性化する取組も行った。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

耕作放棄地の再生は2015年度より始まり、2023年までに4.5haの農地でイチジク、栗、柿など12品目900本の苗や野菜を植え付けた。また、果実の収穫によりジャム、ドライフルーツの商品開発が始まり、県内外の販売ルートを確認し販路拡大に取り組むとともに、「果樹の里山まつり」を開催し、地域の新たな賑わいイベントとして関係人口の創出にもつながっている。（受賞歴）

令和5年度農林水産祭むらづくり部門 農林水産大臣賞

○ 今後の展望（将来に向けて）

今後も果樹を育て、新たな加工品開発や商品PRを検討し販売促進を進めるなど、むらづくりをゆるやかに発展・継続させていく。



果樹の里山ビジョン作り

代表者からのコメント

地域の人と楽しみながら可能な限り継続したいと思います



佐々木 千代子氏

地域住民と連携して農作物を守る

日野郡鳥獣被害対策協議会実施隊（日野郡日南町、日野町、江府町）

チーフ 高野 伸也

○「捕獲」ではなく「農作物を守る」対策で住民意識を変える

○地域ぐるみの侵入防止対策による被害金額・面積の減少

URL: https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/hyousyou_zirei/hyousyou/r5_05_hino.pdf



カテゴリ

鳥獣害対策・シビエ

○ 取組内容

日野郡3町が合同で設立した「日野郡鳥獣被害対策協議会」の実施隊では、集落講習会の開催、地域に適した侵入防止柵の普及、集落ぐるみの対策体制の構築を推進している。

○ 取り組みに至った経緯

2010年7月に行政サービスの維持・向上や効率的な行政運営の促進と共通する課題の解決に取り組むことを目的に、県と日野郡3町で「鳥取県日野地区連携・共同協議会」を設置し、共同で鳥獣被害対策に取り組むことになった。

2013年12月に日野郡3町で「日野郡鳥獣被害対策協議会」を設立、実施隊を設置して2014年4月から活動を始め、「捕獲」ではなく、住民に焦点を合わせ「農作物を守る」ことを目的に活動している。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

実施隊が活動を始めた時、地域住民からは捕獲要望が多く、住民の多くが「被害を受ける」ことが問題ではなく、「野生鳥獣がいること」が問題だと考えていた。しかし、「農作物被害をなくすための対策とは何か」をしっかりと考え、「捕獲」に頼らず、地域住民が「地域ぐるみで被害を減少」できる体制の構築や対策の講習、普及活動を行った。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

地域ぐるみの対策により住民の意識が「捕獲」から「どうしたら被害をなくせるか」に変容し、適切に対策を行えば効果があることが理解され、侵入防止柵の年間設置延長が、取組当初から4倍以上増加し被害金額・被害面積の減少につながった。

(受賞歴)

鳥獣対策優良活動表彰 農村振興局長賞 被害防止部門(団体)(R5)

○ 今後の展望(将来に向けて)

その時々に応じた課題に向き合い、獣害対策を頑張る地域の皆さんをこれからも支援していきたい。



地域住民と実施隊による侵入防止柵の設置

チーフからのコメント

少ない人数でも引き続き、皆さんのために頑張ります！



高野 伸也氏

農地を守り活かし、田園風景を守るために

ライスフィールド株式会社（松江市下佐陀町）
代表取締役 吉岡 雅裕



カテゴリー

農地集積

生産基盤強化

担い手

生産性向上

土地利用型作物

地域活性化

○ 取組内容

松江市下佐陀地区において、主食用米をはじめ加工用米、WCS用稲、そば等を栽培するほか、無人ヘリ防除等の作業受託を実施。耕畜連携にも力を入れ、WCSのほか稲わらや籾殻を松江市内外の畜産農家に供給している。令和6年度の作付面積は約245haで、代表取締役のほか17名の社員が従事している。規模拡大に伴い、営農管理システムや先進的な技術導入を積極的に行うとともに、複数品目・品種によって作期分散と農地・機械利用効率を高め、作業の省力化と生産コスト低減を図っている。また、土木会社を設立し、冬期の仕事を確保することにより、通年雇用を可能としている。

○ 取り組みに至った経緯

「生まれ育った地域の農地を守り活かし、田園風景を守っていきたい」との思いから、平成14年に2戸の共同経営からなる「農業生産法人ライスフィールド株式会社」を設立し、42.6haの作付、400haの無人ヘリ防除の作業受託を開始。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

従来は社員が作業指示待ちの状態であったが、平成30年から作業意識・環境改善のため、社員だけでミーティングを実施することにより、自ら考えて行動する環境作りを行った。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

- ・全国優良経営体表彰 法人部門(H22)
- ・第52回日本農業賞「個別経営の部」大賞(R4)
- ・令和5年度農林水産祭農産・蚕糸部門 内閣総理大臣賞

○ 今後の展望(将来に向けて)

社員が安心して働くことのできる職場とすることを理念とし、後継者育成や施設整備を充実させ、地域農業が継続できる強い体制作りを図っていく。また、社員が全ての仕事を同レベルで行えるようになることを目標としている。



稲わらの回収作業風景

経営者からのコメント

後継者育成にも力を入れ、地域から預かっている農地を守っていきます。



吉岡 雅裕 氏

隠れた資源「大田の大あなご」のブランド化

大田商工会議所（大田市大田町）
事務局長 沖 和真



カテゴリー

その他

○ 取組内容

大田市産のアナゴのブランド化を図り観光需要を喚起するため、地域名を入れた「大田の大あなご」と名付け、脂質やうまみ成分等の美味しさをデジタル検証し「見える化」を図るとともに、行政・飲食店・食品加工事業者・観光DMOなどで協議会を形成し、料理コンテストの開催やアナゴ料理・加工品の開発、情報発信などに取り組んだ。

○ 取り組みに至った経緯

大田市産のアナゴは、他産地と比較して大型である。平成29年から3年連続水揚げ1位である島根県の中でも大田市の漁獲高は約6割を占めるが、市内での流通は1%も満たない状況であった。人口減少が課題となっている当市の活性化のため、平成30年度から本格的に「大田の大あなご」のブランド化を推進した。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

ブランド化推進には通常多くの予算が必要となるが、事業の企画のほかロゴマークやパンフレット、幟、標語等のデザイン作成を全て職員が担うことにより、行政からの少額助成を得ながらの「ゼロ予算」の取組が可能となった。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

令和5年3月時点で、大田市産のアナゴの市内流通量は15%にまで上昇した。また、大田市で開催された将棋の王将戦において、令和5・6年の2年連続で藤井王将が「大田の大あなご」を食し、全国へのPR効果があった。加えて、行政機関や学校等での標語作成等の活用も相まって、需要が着実に増加し、漁業者の所得向上に大きく貢献している。

・第10回「ディスカバー農山漁村の宝」グランプリ（R5）

○ 今後の展望（将来に向けて）

漁師の水揚げ等の見学などのメニューを整備するとともに、「大田の大あなご」の地域商標登録を目指し、大あなごを目的とする観光客増加に繋げる。



大あなごの料理例（大あなご丼）

事務局長からのコメント

地域資源を再認識することで付加価値を高めることができました。また、食材は多様な業種に影響を与えられることを実感しています。



沖 和真氏

ぶどうの「ハイブリッド生産団地」による産地振興

J A 岡山加茂川ぶどう部会（加賀郡吉備中央町）

部会長 代表 瀬尾和弘

○ピオーネ、シャインマスカットの栽培

○新規就農希望者への支援（ほ場のリース、研修場を完備）

カテゴリー

農地集積

生産基盤強化

担い手

園芸



ハイブリッド生産団地

従来の施設整備に加え、担い手の確保・育成、新技術の研究開発等の複数の目的をもつ産地。

○ 取組内容

ぶどう産地の規模拡大に向け、町・JA・ぶどう部会・農業公社などの関係機関が連携し牧場跡地を利用した、ぶどうのハイブリッド生産団地を整備するとともに、新規就農者を積極的に受け入れている。

○ 取り組みに至った経緯

平成22年町営牧場の休止決定により跡地利用が課題となり、関係機関による検討の結果、平成24年3月に町がぶどう産地拡大のために活用することを決定。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

- ①産地拡大の優良農地対策として、水源確保、跡地の原型を生かした区画配置、パイプラインなどのかんがい施設を整備。
- ②多様な担い手確保に向け、団地内に研修ほ場を設置し、研修後に、新規就農者本人に貸付けるなど初期投資を軽減する取組等を実施。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

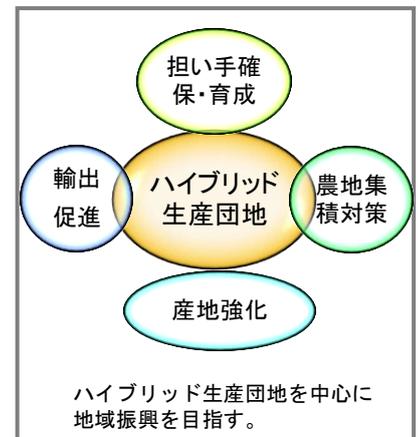
平成23年～令和5年の間で部会の農家数が26名から44名に、栽培面積も6.4haから16.5haに増加。このうち、新規就農者が半数以上を占め将来の生産団地を支える担い手が確保できた。現在、ぶどう部会としての販売額は2億8千万円、生産量が153トン。ぶどう生産団地の新規就農者が定住し、地域住民との交流を通しての地域活性化を実現。

- ・岡山県農林漁業近代化表彰（R2）
- ・第53回日本農業賞「集団組織の部」大賞（R5）
- ・第63回農林水産祭「日本農林漁業振興会会長賞」（R6）

○ 今後の展望（将来に向けて）

アジア地域への輸出に向けて、マーケットインの視点で生産・供給体制を図り、儲かる農業を推進。

ぶどうをはじめとした地域の特産品をPRし、今後も地域内外から就農者を迎え入れ、関係人口の増加による地域活性化を目指す。



部会長からのコメント



岡山に1ターンの10年。自分が受け入れてもらったように、

新規就農者を手厚く支え、産地を盛り上げていきたい。

瀬尾 和弘氏

農福連携による労働力確保と障害者の育成指導

株式会社おおもり農園（岡山市中区兼基）

代表取締役 大森 一弘

○いちごの生産・販売（自ら障害福祉サービス事業所の設立などにより安定した労働力を確保し、経営安定と規模拡大を実現）

○ノウフクJAS取得（令和3年度）

○URL : <https://omorifarm.jp/>

HPはこちら

カテゴリー

担い手

園芸

農福連携



○ 取組内容

平成14年にいちご栽培10aからスタートし、年間を通して作業時間が長いいちご栽培の労働力確保のため障害者を受入れ。

平成23年にはNPO法人杜の家及び就労継続支援A型事業所「杜の家ファーム」を設立。

現在、杜の家ファームの障害者20名のうち6名～10名が施設外就労でいちごを栽培。

○ 取り組みに至った経緯

夫婦2人で就農後、労働力の確保が課題となっていた中で中国四国農政局主催のシンポジウム「クローズアップ農の福祉力」への参加を契機に、障害者の受入れを決意。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

障害者が視覚的に理解して効果的に作業が行えるよう、

- ①収穫後の選別から出荷までの作業工程を階層分解し、具体的な作業手順をわかりやすく写真で示した「マニュアル」を作成。
- ②作業ミスの防止のため、作業場に「音声選果機」を導入などを実施。

栽培技術を習得した障害者が、いちごの手入れ・収穫作業等を担い、新しく雇用したパートに対して作業指示を行うことができるよう育成・指導。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

- ・いちご栽培やその他の施設外就労との組み合わせにより、利用者の平均賃金（月額）は59,522円（H21）から90,741円（R4）に上昇。
- ・ノウフクアワード2023 優秀賞

○ 今後の展望（将来に向けて）

農福連携の取組効果をPRするとともに、栽培技術を習得した障害者が将来の地域農業の担い手となれるよう育成・指導。併せて地域の特産品のぶどうや露地野菜の栽培などを通じて耕作放棄地の解消に取り組む。



ノウフクJASマークを記載したパッケージ

経営者からのコメント

農業と福祉を連携させて安定した農業経営を実現させたい。



大森 一弘氏

安価で高品質な飼料の安定供給を目指して

広島県酪農業協同組合（三次市東酒屋町）

組合長 温泉川 寛明

○購買事業・みわTMRセンター、乳製品・生乳販売事業 等

URL: <http://hiroraku.or.jp/>

カテゴリ

生産基盤強化

土地利用型作物

畜産



稲WCS



ラッピング中のTMR



出荷を待つTMR

○ 取組内容

広島県酪農業協同組合「みわTMRセンター」は、発酵タイプの完全混合飼料（TMR）に自給飼料（極短穂型飼料用稲WCS）を利用することとして、平成26年に「強い農業づくり交付金」を利用し、新たに施設整備し製造を開始した。耕種農家、酪農家と資源循環型の耕畜連携システムに取り組み、TMRの原料のうち輸入粗飼料の一部を極短穂型飼料用稲WCSに置き換えることで、低廉かつ栄養価が充実し、また飼料自給率の向上を図るとともに地域の持続的な農業経営を支えている。

○ 取り組みに至った経緯

作業時間の省力化と飼料自給率の向上に取り組み、生乳出荷組合員数の減少速度が緩和又は歯止めがかかるよう「安くて良質なTMR飼料の組合員への供給」と「1円でも安いTMR飼料の供給」を掲げ、職員による供給指導の充実を図りより多くの組合員に利用戴きたいとして取り組んだ。耕種農家としても、耕畜連携による経営の安定と、これを軸に地域農業の活性化が見込める。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

輸入粗飼料から極短穂型飼料用稲WCSに置き換えた後に、一部の利用者においては嗜好性のムラや、夏期の乳成分が基準を下回る問題が生じたが、広島県立総合技術研究所畜産技術センターを始めとする関係機関と連携し、給餌試験や血液プロファイル検査等の結果を基に配合割合や技術的な改善を加え、平成30年度より嗜好性のさらなる向上とともに、夏場の乳脂肪率の低下防止に成功した。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

- ・第10回全国自給飼料生産コンクール 農林水産大臣賞
- ・令和6年度農林水産祭畜産部門 日本農林漁業振興会会長賞

○ 今後の展望(将来に向けて)

TMRセンターの拡充整備への検討を進めるとともに、極短穂型飼料用稲WCSの配合割合を高め、さらに安価なTMR飼料の供給を目指します。

資源循環型の耕畜連携システム

農業生産法人等

畜産農家

畜産農家の経営安定・担い手確保



たい肥の供給



飼料用稲WCSの供給



みわTMRセンター



TMRの安定供給

広島県酪みわTMRセンター長からのコメント

令和5年産は飼料用稲の田植え時期に降水量が少なく、作付けにも影響を及ぼしました。令和6年産においても暑さの影響から減収状況にあり、これらの改善に向けては畜産技術センターと取り組んで参ります。今後も耕畜連携を軸に極短穂型飼料用稲WCSを活用し高品質な飼料供給に努めて参ります。



松尾 雅也氏

地域との連携を通じた協動的な学びの充実を図る

広島県立広島特別支援学校（広島市安佐北区倉掛2丁目）

校長 大元 みどり

○農福連携、地域社会との連携、連携の輪の広がり

URL: <https://www.hiroshima-sh.hiroshima-c.ed.jp/> ひろとくから広がる緑の若葉

カテゴリー

園芸

農福連携



○ 取組内容

- ① 全ての年次の生徒が、自信や生きがいをもち、自立と社会参加を目指せることを目的にして、知的障害部門高等部の作業学習【農業】の授業では、学校内の圃場で農作業を実施。
- ② 土ふるいや堆肥作りなどを行うため、攪拌機のある屋根付き小屋を整備し、作業棟には車いすの児童生徒が室内で安全に作業できる水耕栽培の棚を設置している。
- ③ 地域の公民館での野菜の販売や、近隣住民を対象に訪問販売（受注型）を実施。
- ④ 県内の農業を専門とする高等学校と連携し、土壌調査を依頼するなど、生徒同士が学び合う場を設けているほか、近隣小学校の児童に農作業を教えている。
- ⑤ ノウフク・アワード2023の表彰式をきっかけに県外の農業高等学校と交流が始まり、支援学校で栽培する野菜を使用した加工食品を共同開発。



野菜販売の様子

○ 取組に至った経緯

自信や生きがいをもって自立と社会参加を目指し、雇用や就労につなげてほしいという思いから農福連携の取組を開始。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

生徒の卒業とともに在校生に栽培技術が継承されなかったため、一緒に農作業を行いながら上級生が下級生に直接アドバイスを行うことで栽培技術が継承されるようになった。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

ノウフク・アワード2023準グランプリ「人を耕す」部門

○ 今後の展望（将来に向けて）

様々な人、場所、方法で農福連携を広め、深めていく。

- ・収穫体験や農作業を通して、地域に対して障害のある児童生徒や特別支援学校の取組について理解を図るとともに、農業に触れるきっかけを創出する。
- ・農福連携を通して人とのつながりを増やすことで、生徒の雇用につなげる。

大元校長からのコメント

本校では、全校児童生徒が主体的に取り組む地域清掃「倉掛の街も学校もきれいにしようプロジェクト」通称「街きれプロジェクト」や「農福連携」を地域の皆様とともに推進しています。



皆が主役 福来る里で美田をつなぎ、にぎわいの創出

農事組合法人福の里（阿武郡阿武町）

代表理事組合長 植田 寿美

○主な栽培：水稲、大豆、野菜及び薬用作物



カテゴリー

土地利用型作物

6次産業化

○ 取組内容

標高400mの高原地域で、水稲や大豆の生産を主体に野菜や薬用作物などの複合経営に取り組む。JGAP認証を受け、生産物だけでなく、働く人への安全・安心にも配慮した取組を目指す。

主食用米の「コシヒカリ」は、化学肥料・農薬を5割低減した「エコやまぐち農産物認証（エコ50）」を取得。また、GI萩※に原料米を供給する萩酒米みがき協同組合に出資加入し、山田錦の栽培に取り組む。

女性の視点で地域を盛り上げる目的で、農産物加工所・直売所を整備し、餅・おこわ・柏餅・菓子などの農産物加工品を開発・販売。

社会福祉法人の地区内進出を契機に、町、社会福祉法人、当法人の三者で「阿武町農福連携協議会」を設立し、農福連携に取り組む。

※2021年3月30日、国税庁が酒類の地理的表示として指定。



社会福祉法人とはげかけ作業

農福連携

地域活性化

○ 取り組みに至った経緯

老朽化した「ため池」の漏水修復による断水で5集落で水稲作付が不可能となり、転作作物として大豆栽培に取り組むこととし、大型機械の導入など共同作業で行ったことを契機に平成15年に水稲と大豆を中心に生産を行う法人を設立。

組合員の減少や高齢化による担い手不足が深刻化する中、同法人が地域（むら）づくりの中核としての役割を担い、新規就業者の雇用や農福連携、女性活躍の場の提供、イベントの開催による交流促進など、地域に賑わいを創出する取組を始める。



女性部が作る加工食品

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

法人化に当たっては、地域の合意形成に苦労したが、粘り強く交渉を重ね、設立時に5集落・経営面積75ha、令和5年には7集落・経営面積115haにまで拡大し、環境に配慮した農業を実践。

担い手となる新規就業者を雇用するために、年間の農作業確保として、冬季作業に薬用作物の栽培を導入。また、農福連携により働く場の提供と労働力の確保でWIN-WINの関係を築く。

地域を盛り上げるために、女性部を組織化し、加工所や直売所建設につなげ、賑わい創出の一翼を担う。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

令和5年度農林水産祭むらづくり部門 農林水産大臣賞

○ 今後の展望(将来に向けて)

現在、若い社員が3人いる。彼らが、今後の法人運営やこの地域をどうやって守っていくか、考えてもらえることを期待している。

組合長からのコメント

福田地区を未来ある地域にしたい。



植田 寿美 氏

マイヤーレモンで地域を元気に！

株式会社神東ファーム（岩国市由宇町）

代表取締役 瀧山 進

○マイヤーレモンを栽培し、青果や果汁等を販売。地域の学校給食にも提供。

URL: <https://shinto-farm.com/>

就労環境整備



地域おこし



安心・安全なもの作り

○ 取組内容

・「思い描くのは会社の未来ではなく地域の未来」をコンセプトに、西日本では珍しいマイヤーレモン※園を地域活性の中心に据え、耕作放棄地の再生や新規就労機会創出を図るほか、地域内外の人と人のつながりを生むための観光農園の運営やイベント活動による地域づくりに取り組む。

・有機肥料による土づくりと農薬を極限まで抑えたマイヤーレモンは、安心して皮ごと料理や飲み物に使える食材として高評価を得る。また、地元事業者と協力して6次産業化に取り組み、売上げの一部を「赤い羽根共同募金」に寄付するなど地域の福祉活動にも貢献。

・市内の小中学校・幼稚園の給食の食材として採用され、子供たちにマイヤーレモンが地元の自慢の食材として郷土愛をもってもらえるよう食育に力を入れる。

※オレンジとレモンとの交雑種

○ 取り組みに至った経緯

高齢化による人口減少や耕作放棄地の増加など地域衰退の危機感が増す中、かつての美しい景観と活気を取り戻そうと、地域おこし協力隊の協力を得て8名のメンバーが、収益性の高いマイヤーレモンに注目し栽培に取り組むことを決意。

令和元年、地域振興協議会内に生産部会「レモンの会」を設置し、マイヤーレモンの栽培を開始。令和2年に生産を本格化させようと同部会を法人化し「株式会社神東ファーム」を設立。翌年4月に地元県立農業大学校の新卒を1名採用。

○ 取り組む際に生じた課題と対応方法

・栽培のノウハウがなく、栽培方法を習得するために三重県で研修。
・販路拡大に向けて、ホテルでの試食会やフォトコンテストの実施、料理研究家とのコラボによるマイヤーレモンレシピの公開などで知名度アップ。

○ 取組の成果(受賞・表彰等)

- ・第11回「ディスカバー農山漁村の宝」(R6)
- ・第10回「ディスカバー農山漁村の宝」中国四国農政局選定 (R5)

○ 今後の展望(将来に向けて)

マイヤーレモンの産地化を目指し、販売先や生産農家を拡大して地域活性化をさらに高めていきたい。



上写真：6次産業化の商品
下写真：学校給食（レモントーストとアジのマイヤーレモン風味）

代表取締役からのコメント

単に売上を伸ばすだけでなく、地域を元気にしたい！そんな思いで頑張っています。



瀧山 進氏